



たとえば絵なら、絵かきは「風」をどう描くだろうか。また音楽なら、作曲家は「風」をどんなメロディーにするだろう。形や色はもちろん、残していく音も実にさまざまな「風」という題材は、そのとらえどころのなさゆえに魅力的だ。私に関わる舞踊というジャンルでも、題材として強い人気がある。

「風」をどう踊るか――。演じる対象が人物なら、行動もしぐさもつかまえやすいし、樹や花の場合も、その形や変化を模した動きから取り組むことができる。絵でいうなら具象画の手法で、題材の本質を追求していくように。しかし「風」が相手の場合、形をそのまま描くことはできない。いかにも「風」だというような、ステレオタイプの表現が得意でない。

どこをふきぬけていくか……街か、森か、人の心か、またいつぶく風か……春か、冬か、夕暮れか、それらによって色も、においも、それぞれ全く違うといったふうに多種多様で、また刻々と変化する

「風」。人は風の無責任な変わり身のはやさに惑わされるくせに、絶えず新しく生み出されるものだけがもっている初々しい透明感にひきつけられる。柔らかくそよそよと頬を撫で、人を穏やかな気持ちにさせたかと思うと、鋭い刃物のように冷たく切ったりするから本当にあぶない。この安定感のないあやうさが、また心を揺らすのだ。

では、実際にこのあやうい「風」をダンスで表現するとしたらどうするか。風に限らずどんな題材でも、舞踊化する際、私は次のような取り組み方をする。

- (イ) 題材そのものになる。
- (ロ) 題材に対応するものや人になる。
- (ハ) 題材から連想されるものやことばをピックアップし、ムーブメント化する。
- (ニ) 題材のもつ特性を強調し、デフォルメして加え、味つけする。

(他にも作品によっていろいろな方法が考えられる

し、他の舞踊家の人たちは全く別の取り組み方をしているかもしれないが。)

具体的には(1)では、風そのものになって動いていく。さささっと走りぬけ、ヒュルンと身をひるがえして方向をかえ、からだをしながら回して旋回してみる。すると風をきって走っている、つまり風に対向しているはずの自分自体が風であるかのように感じられる。からだを、皮膚をとりまく空気と、からだの境目がなくなってくる。外と内が一体となり、からだは周囲に溶けて透明になってしまうような感覚になる。

(1)では風に対して反応するもの、例えば秋風になびく稲穂になって首や背をかすかにそらせたり、両手をひろげて風をいっばいにはらみ深呼吸する巨大な帆になってみる。また、北風に吹き寄せられて目をまわす枯葉たちになって細かく足踏みしながら回転してみる。こうやって動くなかで、風のいたずらな横顔やあらがえない強さ、そして通りすがら全て

のものに声をかけ肩をたたき、寛さに気づく。

(1)は連想ゲーム。風↓嵐↓ふきとばされる古いボスター↓散ってゆく時↓見失う↓探す…といった具合に続々と連想をひろげ、出てきた語のひとつひとつを踊ってイメージを展開させるなかで深めていく。

(2)は、例えば北風を踊るなら、その冷たさを強調するため、手先やつま先を鋭くとがらせて、空間に何度も突きさす動きをくりかえすなど、風のもつ具体性、リアリティから距離はあるが、特徴を強いイメージで表現する動きをみつける作業だ。

私は以前『ずれた風』という舞踊作品を共同作業のなかから創ったことがある。旅芸人の粗野な男と頭が弱く小犬のような少女の二人連れ、子をなくした女こじき、コケティッシュな犯罪者の四人が出会い、いつのまにか不思議なきずなを結び合って、世間の白い目と抑圧をはねとばして通りすぎる、そんな内容の作品だ。

四人は無風の町に吹く一陣の風の如き存在で、町に微妙な変化をもたらす。四人を無視し排除しようとしていた人々の心にさえ、認識できない変化が生まれている。そんな存在を描きたかった。

乳母車からすべり落ちて登場する少女は、卵からかえるように丸く縮めた背中から手足を少しづつ伸ばしていく動きにして、「生まれる初々しさ」をだそうとした。手かせをされたまま激しく踊る犯罪者に嵐のような「秩序のない強さ」をたくした。地面をほうようにしていた女こじきの、ふいに幻の子を抱きあげて伸びあがる「やわらかな」動きにも、犯罪者の誘いにふらりと去っていく男の芸人の「気まぐれさ」にも、絶えず風が感じらる作品にしたかった。「順風」ではない風をやりたくて創った作品だった。

さて、この文を書くうちに気づいたのだが、「風」を表現するのに、舞台、そして舞踊は全く適当なジャンルかもしれない。流れ去りとどめること

のできない風は、全く同じものをくりかえすことのできない、一回性の舞台でこそ生きるといえないだろうか。私はまた舞台から風が流れ出るような作品をめざしていきたい。

(舞踊家)

